

2016年度入学者選抜・試験対策

AO入試・公募制推薦入試 動向調査資料

●調査対象

ライセンスアカデミー内でファクシミリ番号の登録がある、4年制大学782校を調査対象にした。

●調査方法、回収率

2015年4月16日にファクシミリにて質問紙を送付。回答の締め切り日は同月22日。

大学によっては、学部ごとに、もしくは短期大学部の分も含め回答が寄せられてた。それらをカウントした回答数は387。

なお、大学単位でカウントし直した場合、回答数は352となる。「 $352 \div 782$ 」の数式で、回答率を算出すると45.0%になる。

●集計上の注意

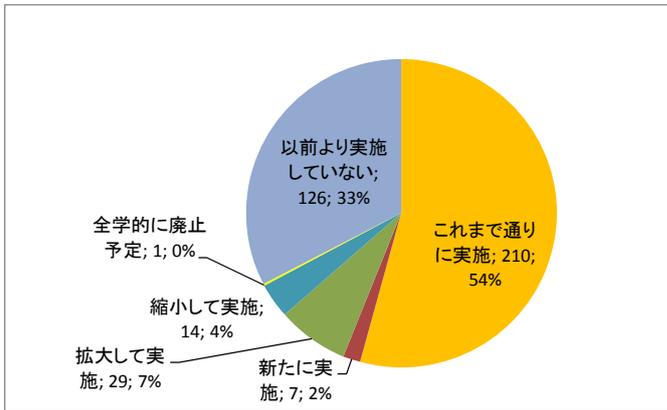
「無回答」は本調査において集計に加えていない。そのため、グラフ・表に「無回答」の欄はない。

回答大学の内訳

設置者	回答数	割合
国立	52	13%
公立	48	12%
私立	287	74%
総計	387	100%

① AO入試について

Q 平成28年度入試におけるAO入試の実施予定は？



* 左図「拡大して実施」29回答の詳細(複数回答あり)

実施学部数を増やす	実施回数を増やす	募集人員を増やす	詳細無回答
7	9	12	5

* 左図「縮小して実施」14回答の詳細(複数回答あり)

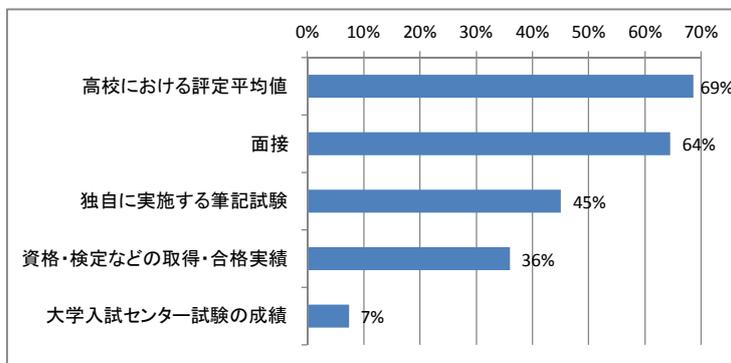
実施学部数を減らす	実施回数を減らす	募集人員を減らす	詳細無回答
3	8	5	0

全回答の半数以上にあたる210回答が「これまで通りに実施」。

「拡大して実施」は7%。拡大の理由として、「学習意欲のある生徒を求めているため」「本学への修学意欲の高い学生の確保」などが挙げられた。AO入試によって「意欲ある」学生を得ようという強い意向がうかがえる。また、学内のグローバル化促進を目指して、拡大実施を予定する大学もあった。一方、「縮小して実施」は4%で、回答大学の内訳を見ると工業系大学からの回答が多かった。こちらの理由は、「多すぎた回数を減らしたい」「他の入試方式への移行」等が挙げられた。「全学的に廃止予定」は0% (1大学) のみだったが、こちらも工業系大学であり、この系統の今後の動向が気になるところだ。

「新規実施」と「拡大」の合計が9%、一方、「縮小」と「廃止」の合計が4%で、差し引きすればプラス。全体として、28年度のAO入試は拡大傾向と言えよう。

Q 「基礎学力」の把握は？(あてはまるものすべて選択可) ※面接には、エントリー時の「面談」を含めない

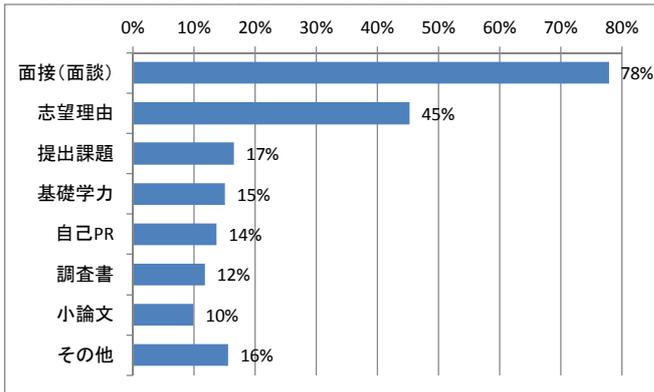


本設問の回答数は242。グラフでは、その242を「分母」に、項目ごとの回答数を「分子」にしたパーセンテージを示している(以下、「複数回答できる設問」では同様に算出)。

「高校における評定平均値」と「面接」がともに60%台。以下、「独自に実施する筆記試験」「資格・検定などの取得・合格実績」が続く。

1位から4位までは、国公立大、私立大問わず、同様の傾向を示す。ただし、5位「大学入試センター試験の成績」を回答したのは、ほとんどが国公立大だった。

Q 入試で重視するポイントは？(2つまで選択可)



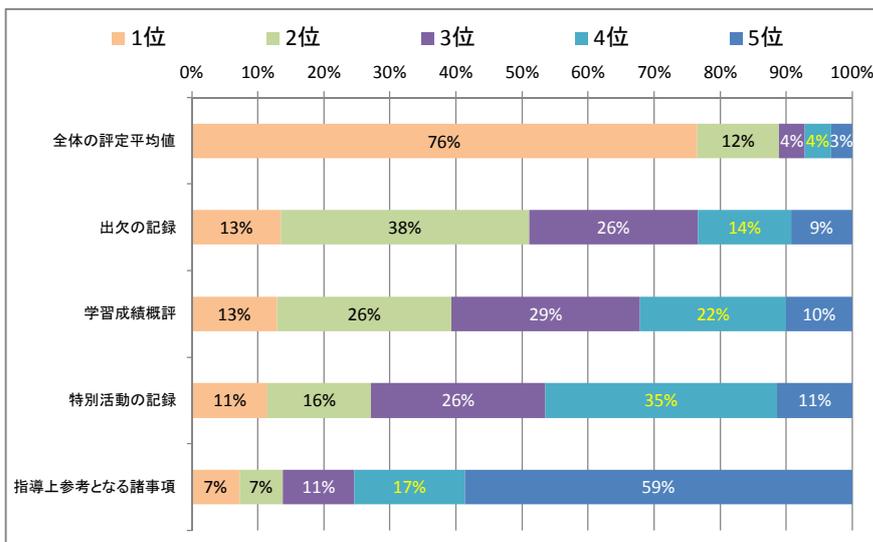
回答数は212。

「面接(面談)」が8割近くに達する。後で紹介する公募制推薦場合が6割であることを考慮すれば、AOにおいてはより重視されていることが分かる。

「志望理由」は2位・45%ではあるが、こちらも合格するための「鍵」になっていると言える。なお、「志望理由」および「自己PR」は、エントリーシート等の出願書類上だけでなく、面接等で聞かれる口述の内容も含んでいる。

「その他」の具体的内容としては、「プレゼンテーション」「体験授業」「実技」などが挙げられた。また、集計には加えていないが、回答欄外に「特に重視するポイントはなく総合的に判断」という回答も、複数見受けられた。

Q 調査書で重視する項目は？(重視する順に1～5位まで順位付け)



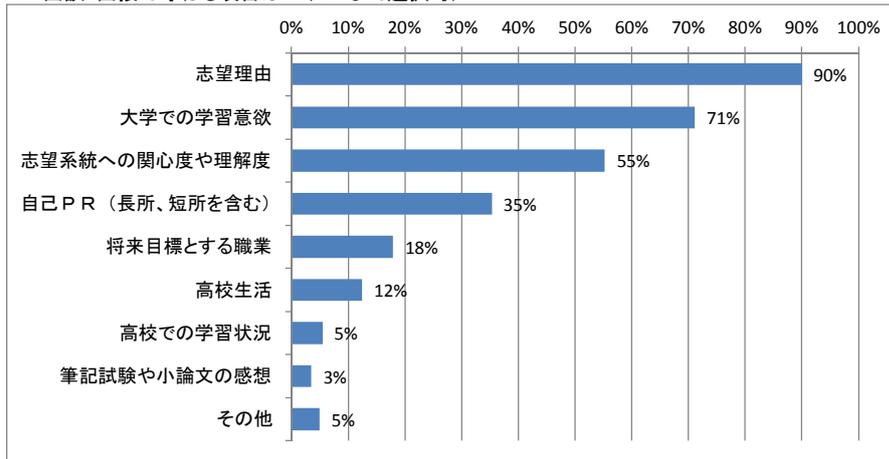
本設問の回答数は項目によって異なるが、およそ140。1位のみ、もしくは4位まで記入した回答もあった。

「全体の評定平均値」を、1位とする回答が76%、2位とする回答が12%。逆に、5位と見なす回答は3%に過ぎない。「全体の評定平均値」が、圧倒的に重視されていることが分かる。

「出欠の記録」は、1位が13%だが、2位まで加えれば過半数となり、こちらも重視項目と言えよう。「全体の評定平均値」と同一視されることもある「学習成績概評」だが、本調査では扱いに違いが認められた。

ところで、「指導上参考となる諸事項」の記入は、高校教員にとって多大な労力を伴うところである。しかし、残念なことに5位が60%近くを占め、1位はわずか7%に過ぎなかった。

Q 面談・面接で尋ねる項目は？(3つまで選択可)



回答数は201。

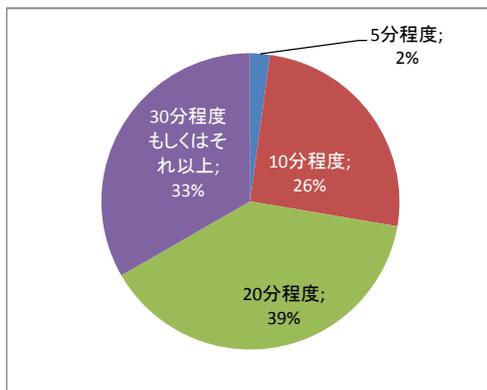
面接・面談では、「志望理由」が必ず聞かれ、「大学での学習意欲」「志望系統への関心度や理解度」も多く尋ねられていることが分かる。「自己PR」を考え、それを練習する生徒は少なくないようだが、本調査では35%であり、約3分の1となっている。

尋ねることはほぼ決まっているため、過去の結果をもとにその対策も可能だろう。

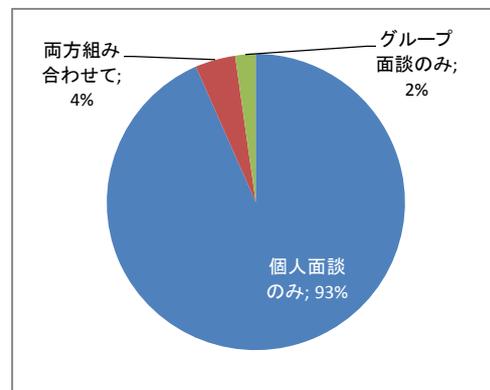
「高校生活」や「高校での学習状況」は、問われる頻度は低い。面談・面接時間は限られているため、調査書や生徒自身が作成した書類から判断していると推測できる。

Q 面談の形態は？ ※「面接」は含めず、「面談」に限って質問

○面談時間



○面談形態



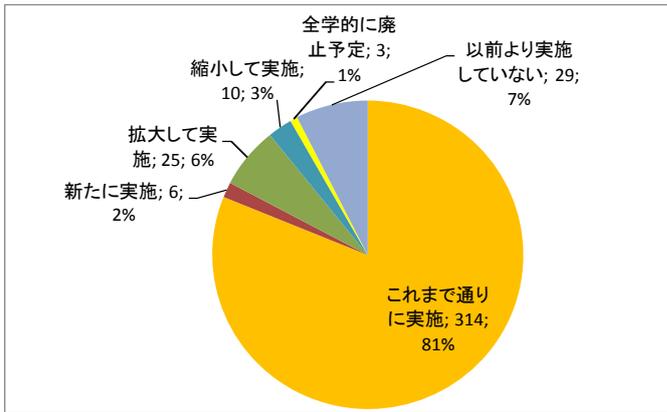
回答数は、時間が141、形態が136。AO入試ならではのプロセスである、「面談」についてたずねた。

時間は、「20分程度」が1位、以下「30分程度もしくはそれ以上」「10分程度」と続く。ただし、これら3区分に大きな差はなく、大学間の違いが明確に伺える。選抜に対する考え方の違い、面談の回数の設定、面接でも話しを聞く機会がある等が、その違いの背景にあると考えられる。

一方、面談の形態は、90%以上が「個人面談のみ」であり、就職試験のように「グループ面談」を活用するケースは非常に少ない。

② 公募制推薦入試について

Q 平成28年度入試における、公募制推薦入試の実施予定は？



* 左図「拡大して実施」25回答の詳細(複数回答あり)

実施学部数を増やす	実施回数を増やす	募集人員を増やす	詳細無回答
10	7	10	2

* 左図「縮小して実施」10回答の詳細(複数回答あり)

実施学部数を減らす	実施回数を減らす	募集人員を減らす	詳細無回答
1	1	7	1

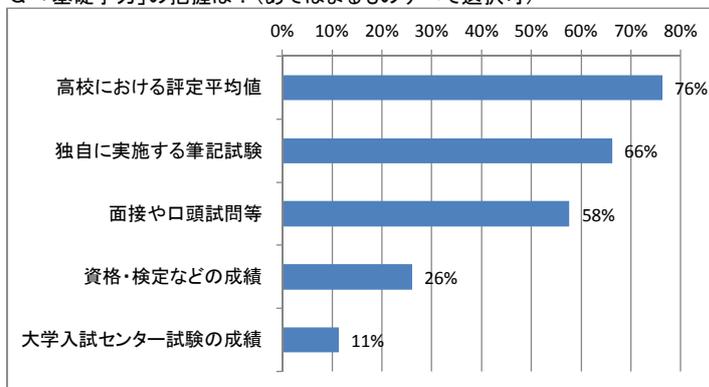
AO入試と同様、「これまで通り実施」が最多。その数値はAOよりも多く、8割を超えた。

「新たに実施」は2%、「拡大して実施」は6%あった。その理由として、「学習意欲のある学生を求めている」「多様な学生を獲得」など、AO入試と類似したコメントが得られた。

一方、「縮小して実施」は3%。「AO入試に定員を振り分けた」「方式の整理」という理由が寄せられた。「全学的に廃止」の大学からは、「指定校へ流れ、受験者が減少した」という回答があった。

「新規実施」と「拡大」の合計が8%、一方、「縮小」と「廃止」の合計が4%。差し引きすればプラスで、AO入試と同様、全体として拡大傾向と言える。

Q 「基礎学力」の把握は？(あてはまるものすべて選択可)

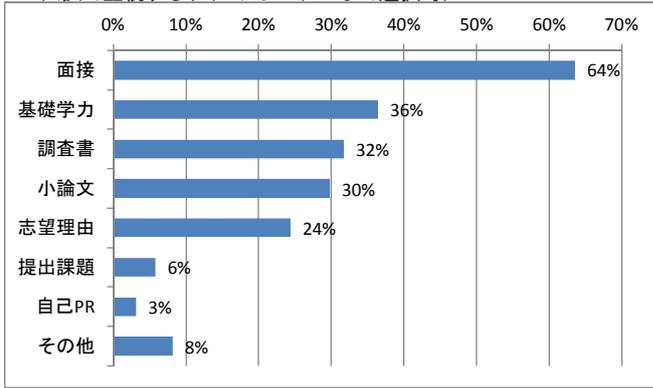


回答数は326。

「高校における評定平均値」が最多なのはAO入試と同じだが、2位に「独自に実施する筆記試験」が続く。また、「面接や口頭試問等」を利用する傾向は、AO入試(64%)よりも低い。

「資格・検定などの成績」は26%で、前年調査の11%から大幅な伸びが認められた。今後の推移が注目される。

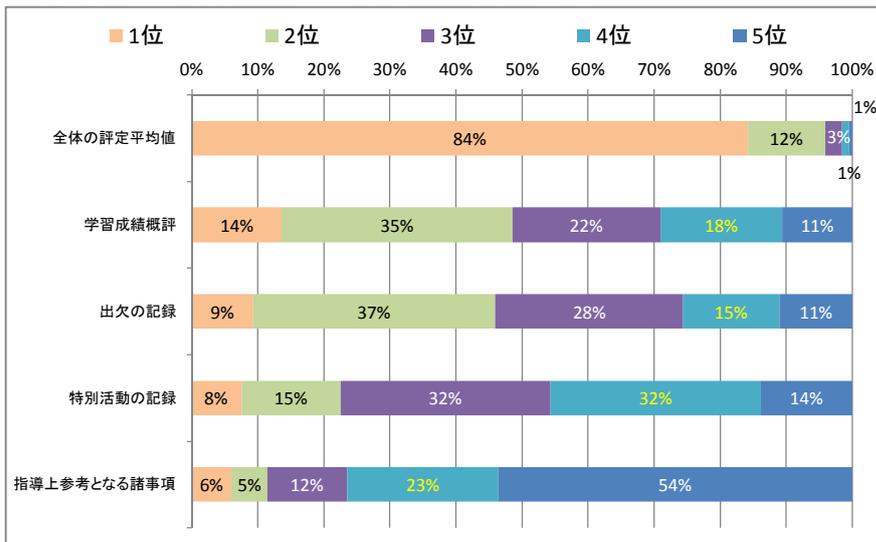
Q 入試で重視するポイントは？(2つまで選択可)



回答数は258。

AO入試と同様、公募制推薦入試においても「面接」重視がうかがえる。1位から大きく差が開き、30%台で「基礎学力」「調査書」「小論文」が続く。公募制推薦は、AO入試と比較して、大学ごとに重視するポイントが分散している。

Q 調査書で重視する項目は？(重視する順に1～5位まで順位付け)



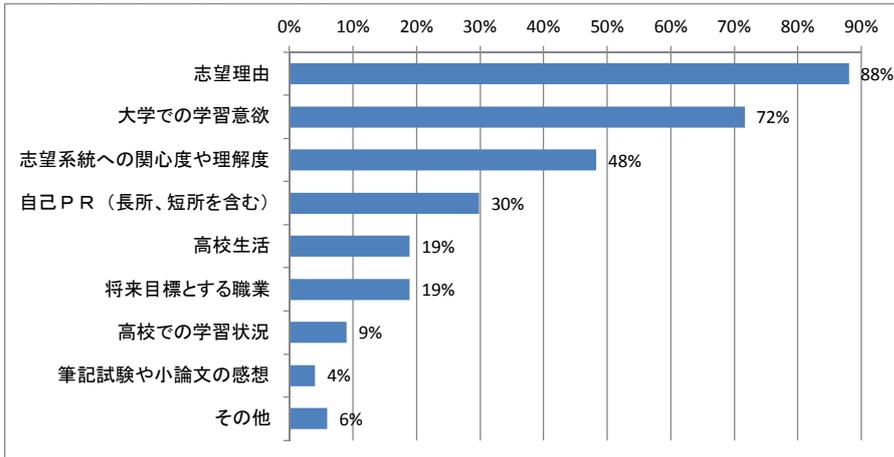
本設問の回答数は項目によって異なるが、およそ170。AO同様に、1位のみ、もしくは4位までの回答もあった。

全体として、AO入試に類似した傾向を示した。

ただし、「全体の評定平均値」を1位とする回答が84%で、AOの76%と比べより重視されている。次は、「学習成績概評」についても同じく、AO以上に重視の傾向が認められる。

一方、「出欠の記録」は「学習成績概評」よりも下に位置した。「出欠の記録」の1位と2位合算で比べると、AO51%、推薦46%で、5ポイントも差がある。

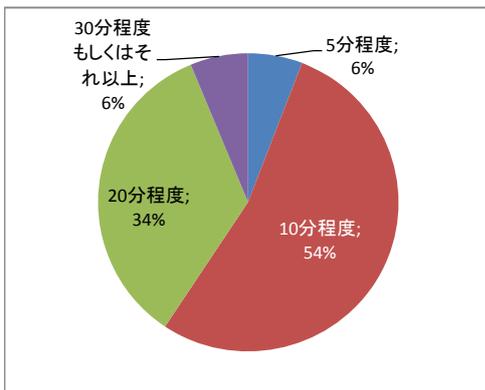
Q 面接で尋ねる項目は？(3つまで選択可)



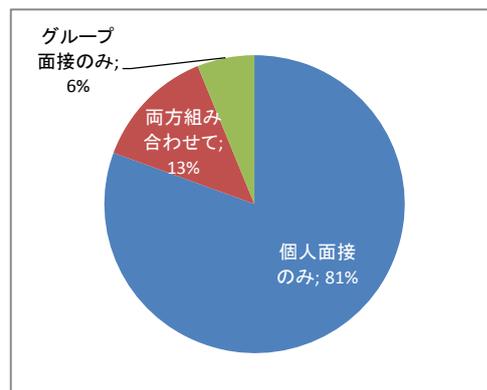
回答数は201。順位、数値含め、AO入試と大きく変わらない結果が得られた。1位は「志望理由」で88%、以下、「大学での学習意欲」72%、「志望系統の関心度や理解度」48%と続く。なお、「その他」の具体的内容として、「表現力」「語学力」「資格」などの回答が挙げられた。

Q 面接の形態は？

○面接時間

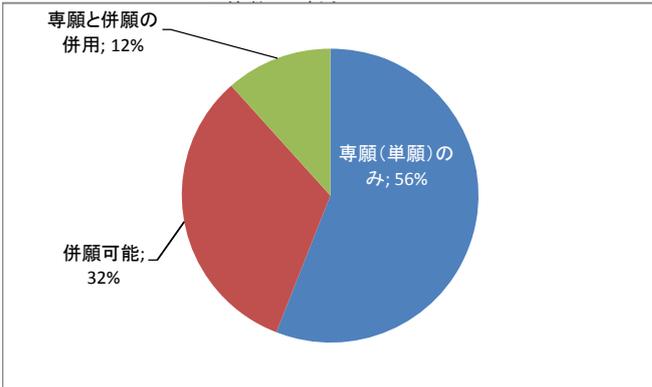


○面接形態



回答数は、時間が224、形態が227。
 時間については「10分程度」が半数を超えた。「30分程度もしくはそれ以上」が少数で、「20分程度」も3割ほど。前述のAO（この場合「面談」）と比すると、全体的に短いことが分かる。
 一方、面談の形態は、8割が「個人面談のみ」。AOと比べると、10ポイント下回り、反対に「グループ面談」を活用をするケースが多くなっている。
 断言は難しいが、同じ面接重視という点は共通しているものの、AO入試の方がより面接重視、公募制推薦のほうがそれ以外の観点も重視していると考えられる。

Q 「併願」の可否は？



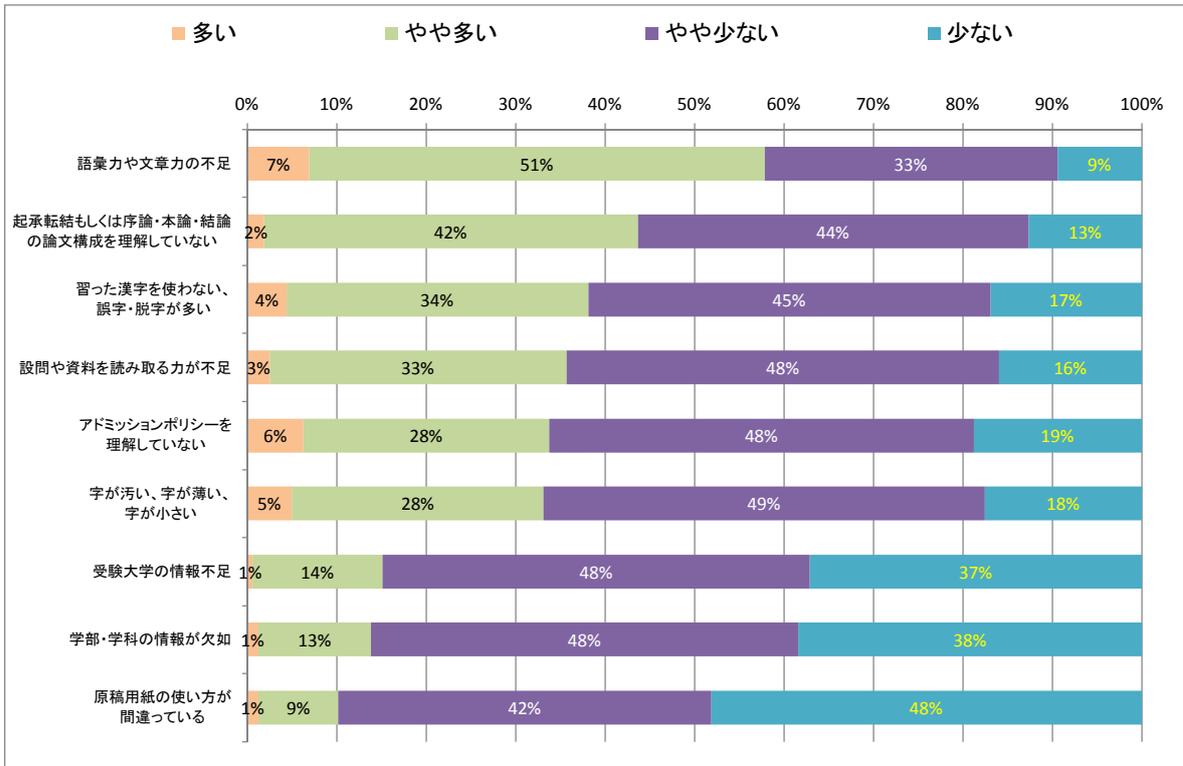
回答数は311。

「専願(単願)のみ」が半数を超え、「併願可能」は3割程度。その「併願可能」とする大学の7割が愛知県以西であり、東日本よりも西日本においては実施されている制度である。

なお、「専願と併願の併用」は様々で、「学部や学科により扱いが異なる」「専願型と併願型の複数の入試方式がある」「1期は専願、2期は併願」「特別奨学金貸与の試験は専願で、通常の推薦入学試験は併願。」などの記述があった。

③ AO入試、公募制推薦入試共通してかかわる設問

Q これまでに提出された同課題について、以下の項目ごとの感想は？
 ※何らかの文章課題(志望理由書、小論文など)を課す大学のみが回答
 (各項目について、「多い」「やや多い」「やや少ない」「少ない」の4択で尋ねた)



文章課題全般について、項目ごとに「○」をつけた頻度をたずねた。設問によって回答数は異なるが、ほぼ160。試験の内容に関わるということもあり、回答が難しい設問になった。

「語彙力や文章力の不足」が最大の問題のようだ。「多い」「やや多い」を合わせると、6割近くの大学が指摘している。それよりは数値が低いものの、44%が「起承転結もしくは序論・本論・結論の論文構成を理解していない」と回答。小論文の基礎知識が不足していることの表れと言える。

「習った漢字を使わない…」 「字が汚い…」 の回答率の高さは、第三者に文章を読んでもらうという意識が低いことの反映だろう。「小論文等で誤字脱字が多い生徒が不合格」になる旨の自由回答もある。

反面、「アドミッションポリシーを…」 「受験大学の情報不足」 「学部・学科の情報が欠如」などの情報不足はそれほど多くは指摘されない。情報アクセスに長けている現代の高校生像がかいま見える。

Q 両入試で、不合格になった生徒の特性は？ ※自由記述形式で回答

各回答を整理し、別ページに一覧として示す。64回答に何らかの記載があった。
キーワードの登場数に注目すると、「コミュニケーション不足」の指摘が最も多く、64回答の約3割に達した。「会話が成り立たない」「人前で話すのが苦手」など。面接が課される入試にもかかわらず、意外な状況が明らかになった。
反面、一般的に指摘されている「学力不足」だが、こちらは意外に少なく1割程度に過ぎない。「学力不足」を前提として、入学者を受け入れざる得ない大学の本音もうかがわれる。そのほか、「意欲」や「志望理由」の欠如を指摘する声も挙げられた。

Q 両入試で、不合格になった生徒の特性は？ ※自由記述形式の回答より
A0では、コミュニケーション能力の不足。
A0入試ではコミュニケーション能力不足、公募推薦入試では基礎学力不足。
A0入試では志望動機が不十分など事前準備不足の生徒が多い。公募推薦入試は学力不足。
A0入試の不合格者において、コミュニケーション能力が著しく不足。
A0はアドミッションポリシーを理解していない。推薦は基礎学力が低い。
与えられた課題をまったくやってこない。コミュニケーション能力がない。
与えられた題目を曲解し、自分の得意分野のテーマにすり替えて展開する。
アドミッションポリシーをまったく理解していない。面接対策の準備が不足。
あまりに安易に合格できると考えている。基礎学力が不足気味。社会や自身の将来について関心が薄い。自身の意見を自分の言葉で語るができない。物事の考え方が受け身。
著しく学習意欲がない。
著しく学力不足。
一般入試で、再度受験する。
学力、意欲、適性が欠けている。
学力試験の成績が悪い。面接時の態度が悪い。
基礎学力があまりにも不足。提出課題の出来が稚拙。
基礎学力がまったく足りない、志望の意志が不明確。
基礎学力の不足。
基礎学力不足(化学)、アドミッションポリシーの理解度があまりに低い。
基礎的な学習習慣に著しく欠ける。
高校での学習成果が十分でない(調査書の評定平均が低い)。小論文等の文章で誤字脱字が多い。
コミュニケーション能力(伝える力、聞く力)が不足。
コミュニケーション能力が著しく欠如。また、受験の重要性を理解できておらず、入学試験に対し明らかな準備不足が見受けられる。
コミュニケーション能力が著しく低い。
コミュニケーション能力が不足しているため、会話が成り立たない。
コミュニケーション能力の不足。
コミュニケーション能力不足。アドミッションポリシーにまったく不適合。
質問を理解できず、解答した言葉がその内容が質問に合致していない。
志望学科が求める力を、積極的に身に付けようとする意欲が感じられない。
志望動機があいまい。
志望動機が不明確、学習意欲に乏しい。
志望動機が不明確で、勉強意欲に乏しい。
志望理由が曖昧で、機械的な応答しかできない。小論文がまともに書けない。
志望理由が答えられない。※2回答あり
志望理由が不明確。
志望理由が不明確で、事前準備不足(ゼミを必修としているので、ゼミで発言できる能力を面接でみている)。
志望理由が明確でない。小論文、面接ともに、質問に対する解答が不能。
受験大学および志望学部学科の情報が著しく不足している。
小論文における知識量が不足。基礎学力の不足。コミュニケーション能力不足。

進学意欲が希薄なため、情報収集力、高校教師の指導を生かす力など、すべてにおいて欠如している。指定校であっても不合格にすることもある。
進学学部学科の必然性がまったく感じられない。
大学・学科に対する理解不足。小論文の練習不足。学力不足。
大学で自主的な学習計画が立てられそうにない。また、基礎的な学力の不足により日常の授業についていけない。
大学で学ぶ目的が明確でなく、意欲が感じられない。
なぜその系統の学問を修得したいのか意欲を伝えられない。
入学後の学問分野にやる気や熱意を感じられない。
筆記試験の点数（公募制）、課題レポートの点数（AO入試）、面接での態度、解答内容（両方）。
評定平均値が基準に足りない。小論文が十分に書けていない。
評定平均値に反して学力が著しく欠如（高校間の格差）。
プレゼンテーションや面接（面談）において、人前で話すことが苦手で、自己アピールや質問に対する的確な受け答えができない。
文章構成力の不足。高校での学習成績の低さ。志望動機が不明瞭。
文章力やコミュニケーション能力が不足。
本番になると極度に緊張してしまうことから、思うように自己PRができない。面接練習の内容を忘れてしまう。面接慣れが重要。
無気力・基礎学力不足。
明確な目標がないので、進学目的や入学後に学びたいことが答えられない。
面接（面談）でコミュニケーションが取れない→質問に対し、解答不能、または不的確な解答。
面接応対がうまくできない。学科に対する専門分野への知識が不足。
面接試験でのコミュニケーション能力の不足。
面接時にまともに会話ができない。
面接において、質問に的確に答えられない。基礎学力が不足。
面接において、志望分野に対する関心や学ぶ意欲、高校時代に経験したことなど、自分の考えを言葉で的確に伝えることができない。
目的、目標意識の欠如。面接におけるマナーの悪さ。
目標がはっきりしていないため、きちんと話すことができない。
履修する教科の内容について、正しく幅広い理解ができていない。